

反事実的な比較を用いた危害の説明の擁護

吉澤 ひふみ (Hifumi Yoshizawa)

北海道大学

Counterfactual Comparative Account of Harm and Benefit (危害と利益の反事実的な比較による説明。以下、CCA) とは、どのような事態を危害や利益とするのかに対する説明の一つである。本発表では、CCA への代表的な批判を確認し、その批判を退ける主張を試みる。

CCA は反事実的条件文とその成立条件に関する意味論的枠組みを基礎としている。具体的には、以下のように定式化される。

出来事 e が対象者 S を害する (益する) のは、もし e が生じなかったならば S がよりよかっただろう (より悪かっただろう) ときであり、かつそのときに限る。

ある出来事 e が対象者 S にとって危害 (利益) となるのは、 e が生じない最も近い可能世界における S が、 e に関連した世界における S よりもよりよい (より悪い) ときであり、かつそのときに限る。

例えば、 B さんが J さんに殴られて、全治数週間の怪我を負ったとしよう。このとき、反事実的条件文「もし B さんが J さんに殴られていなかったならば、 B さんはよりよかっただろう」が真であれば、 J さんが B さんを殴ったことは危害であり、反事実的条件文が偽であれば、 J さんが B さんを殴ったことは危害ではない。反事実的条件文が真であるのは、前件 (B さんが J さんに殴られていない) が真となる可能世界を参照し、比較される世界 (B さんが J さんに殴られた世界) と最も類似性のある可能世界について、後件 (B さんがよりよい) が真となるときである。

CCA へはいくつかの批判が示されている。本稿が扱うのは、主に以下の二つである。一つ目は、「行為 a が他の選択肢よりも行為者を益するならば、行為者は行為 a を選択し、行為 a が他の選択肢よりも行為者を害するならば、行為者は行為 a を避ける」という何らかの行為を選択する際の一般的な理由に CCA が反するという指摘である。例えば、3つの行為 (松)・(竹)・(梅) があり、それぞれを実行した結果として行為者が得られる福利について、(松) が最も高い福利をもたらし、(竹) はほとんど福利をもたらさず、(梅) はむしろ負の福利となるとする。通常であれば、行為者は (松)・(竹)・(梅) の順で選択の優先順位を置くだらう。ここでまた、「(松) か、(竹) と (梅) のどちらか」を選択する状況 1 と、「(竹) か (梅) か」を選択する状況 2 が与えられているとする。このとき、状況 1 において、「もし (竹) か (梅) を選ばなかったならば、行為者はよりよかっただろう」が真となるので、(竹) か (梅) を選ぶことは危害となる。他方、状況 2 において、「もし (梅) を選ばなかったならば、行為者はよりよかっただろう」が真となるので、(梅) を選ぶことは危害となり、(竹) を選ぶことはむしろ利益と

なる。通常の判断であれば(竹)と(梅)は(松)よりもより悪い帰結をもつため、(竹)と(梅)の選択を避ける理由をもつように思われる。しかし、(竹)は(梅)よりも行為者を益しているともいえるため、(竹)が選択される理由もあることになる。これは行為を選択する理由と衝突する。したがって、CCAは考え方として不適切であるというのが、一つ目の指摘のたまかなあらすじである。

この指摘には、Thiemeから反論が与えられている。ThiemeはCCAを適用する際の選択肢のきめの細かさに着目し、例えば、先の選択肢(松)・(竹)・(梅)であれば、{松, 竹, 梅}の集合を考えている場合と、{松, 竹 or 梅}の集合を考えている場合があると指摘した。その上で、何かの行為を選択する理由と矛盾しないCCAを提案している。

CCAへの二つ目の批判として、一般的に危害とされる怪我などの事象が危害とは見なされない場合があることが挙がる。例えば、救助者が溺れている人Sを救助しようとして、Sの腕を折ってしまったとする(便宜的に、【救助・骨折事例】と呼ぶ)。このとき、「もしSが骨折しなかったならば、Sはよりよかっただろう」が真とならないならば、骨折は危害とはならない。救助の際にSの骨折が避けられない事象だったのであれば、先の反事実的条件文の前件が真となる世界は、Sが救助されなかったためにSが死亡していた世界かもしれない。そうするとこの反事実的条件文は真とはならず、Sが負った骨折は危害ではないことになる。このように、一般的には危害とされる骨折をCCAは危害としないことがあり、これは私たちの危害の直観に反する。

この二つ目の批判に対して、CCA擁護者であるKlocksiamは解答を与えている。しかし、その内容は「危害か否かの判断は文脈に依存する」というものであり、十分に説得的な説明だとは言えないだろう。

本発表では、Thiemeによる修正されたCCAが【救助・骨折事例】をどのように扱うかを検討する。最終的に、Klocksiamとは異なる観点から、【救助・骨折事例】における骨折もまた危害であると位置付けられることを目指す。

参考文献

- Carlson, E. (2018). "More Problems for the Counterfactual Comparative Account of Harm and Benefit". *Ethic Theory and Moral Practice* 22: 795–807
- Carlson, E. (2020). "Reply to Klocksiam on the Counterfactual Comparative Account of Harm". *Ethic Theory and Moral Practice* 23, 407–413.
- Klocksiam, J. (2012). "A Defense of the Counterfactual Comparative Account of Harm". *American Philosophical Quarterly* 49 (4):285 – 300.
- Klocksiam, J. (2019). "The Counterfactual Comparative Account of Harm and Reasons for Action and Preference: Reply to Carlson". *Ethic Theory and Moral Practice*, 22: 673–677.
- Thieme, A. (forthcoming). "The Question-Centered Account of Harm and Benefit." *Noûs*.